

最後のアブラハムの宗教、イスラーム

現在のイスラームを囲む諸問題

1, イスラーム原理主義(イスラーム主義とはなにか)

- ①世界的な宗教復興運動の中の一環としてイスラームに起こった復興運動のひとつであるが、地域や国、あるいは目標によって様々な形態をもって展開する。イスラーム原理主義は、時期的にイスラエルによるパレスチナ占領と重なったことから事態が複雑化・深刻化した。戦闘的なイスラーム主義の多くは、パレスチナ問題の解決をテーマとして運動が複雑化している。
- ②「原理主義」(ファンダメンタリズム)とはもともとキリスト教の頑迷な聖書至上主義やキリスト教絶対主義などを指す用語である。これをそのままイスラームに用いることは、正しくない。
- ③イスラームではイスラーム復興運動、あるいはイスラーム運動と呼び、必ずしもすべての活動が戦闘的ではなく、人道的に貧困層を支援するグループも存在する。独裁的長期政権などの不安定な政治情勢のもとで、増大する貧富の差や言論の自由、人権が保証されていないことなどに対して起こされた社会運動や市民運動である。
- ④西欧的な自由主義や民主主義とは異なる思想基盤であるものの、イスラームの教えに基づいた民主主義、公共福祉、社会正義の実現と道徳の回復を目指す。
- ⑤多くは理科系のエリート集団を中心として一般市民の支持をえた穏健な草の根運動である。2011年には北アフリカ政権交代後の主役となる。テロや武装闘争に訴えるグループはごく少数派であり、戦闘的過激派は市民的な社会運動と区別されている。

2, ユダヤ教との関係(復習)

- 1, イスラーム史のごく初期に部族間対立があったことによって、クルアーンではユダヤ教徒に厳しい言葉が書かれているが、その後は平和的に共存してきた。イスラームの教義にはユダヤ教からの影響が大きい。ユダヤ教徒は世界のどこでも少数派であり、キリスト教徒よりもイスラーム教徒と共存でき、融和性があった。
- 2, ユダヤ教徒はイスラームの保護を受け入れ、温和な共存体制を作ることができた。中世のユダヤ教徒の多くは(ほぼ全ユダヤ人の90%)、イスラーム支配地域に住んでいた。
- 3, バグダードに都をおいたアッバース朝の時代では、首都近郊にイェシバとよばれる高等ユダヤ学院が建設され、世界各地に散在するユダヤ教徒の学問的・神学的な拠り所となっていた。これらの学問所は、今日まで続くラビ・ユダヤ教の拠点ともなり、神学的にも学問的にも大きな役割を展開することができた。これらのユダヤ学院は、アッバース朝の地方税から運営経費の支援を受けて、活動を展開させていたのである。
- 4, これらの学問所などによって形成された学問やユダヤ・イスラーム文化は 1258 年

のモンゴル侵攻によって、ほぼ破壊されてしまったことは、残念なことであるが、その後も困難な時期を通して、イスラーム教徒とユダヤ教徒との共存と協働は継続された。

- 5、イスラームの中期には、アンダルシア地方を中心にして、一旦廃れたギリシア文明を引き継いで、現代文明の礎となるイスラーム文明が発展したが、この文明発展の成功もユダヤ教徒の参加が大きな成果につながった。近現代のイスラームとユダヤ教の歴史は、オスマン帝国の支配をへて、1948年のイスラエル建国まで、概ね平和的な共存が続いていた。

3, パレスチナ問題とは何か: 近現代の問題の始まり

シオニズムとは何か？

- 1、ユダヤ人がパレスチナなどでユダヤ人国家を建てようとする政治運動。ヘブライ語（旧約）聖書に基づいて、ヨーロッパにおけるメシア主義的なパレスチナ移住願望は前近代からあったが、**政治的目的をもつ世俗的なユダヤ民族主義**としてのシオニズムが現れたのは19世紀後半である。ドレフュス事件に衝撃を受けたヘルツルは、ヨーロッパの国家から差別・排除されるユダヤ人の唯一の救済がユダヤ人国家の樹立にあると考え、1897年に世界シオニスト機構を設立し政治的シオニズム運動を創始した。
- 2、第1次大戦後、パレスチナは**バルフォア宣言**の内容に沿って**英国委任統治**のもとに入る。第2次大戦後、ホロコーストを経験したユダヤ人に国際社会の同情が集まるなか、**1947年11月に国連はパレスチナ分割を決議する**。パレスチナは内戦状態に入り、48年5月にイスラエルの建国をみた。建国後もシオニズムは国家のユダヤ性保持のイデオロギーとして生きつづけ、同国の唱える民主主義理念との原理的な矛盾を内包している。

4, イギリスの三枚舌外交に起因するパレスチナ問題

インドへの道を確保するために中東地域に足がかりを確実にしたいイギリスは、シオニズムを利用して、パレスチナの支配を確保しようとした。1915－7年にイギリスは、英仏露の3国間と秘密協定を結んでいる。これが有名な「イギリスの三枚舌外交」、イギリスの思惟的な政策によって、パレスチナ問題が発生した。

1, フサイン・マクマホン書簡

マッカ（メッカ）のシャリーフ（太守）、ハーシム家（預言者ムハンマドの子孫の家系、現在のヨルダン王家）のフサイン・イブン・アリーとエジプト高等弁務官ヘンリー・マクマホンが、1915年7月から16年3月にかけて交した往復書簡。第1次大戦中、戦後のアラブ王国建設を企てたフサインと、敵国ドイツの同盟国であるオスマン帝国のアラブ人の離反を望んだイギリスの利害が一致したことから、フサインとマクマホンは各5通の書簡を交した。このうち15年10月のマクマホン書簡は、イギリス政府を代表してパレスチナを含むアラブ地域の戦後の独立を認めた。

2, サイクス・ピコ秘密協定

1916年5月に英仏露の3国間で結ばれた秘密協定。この協定は15年10月のフサイン・マクマホン書簡でシリアが独立アラブ王国に入るとされたのに対し、フランスがシリア領有を主張したため、この点を調整しようとしたもの。イギリス代表サイクスとフランス代表ピコが原案を作成した後、ロシアを交えて協定が結ばれた。この密約はパレスチナをめぐるフサイン・マクマホン書簡、バルフォア宣言と矛盾した。17年11月にロシアのボリシェヴィキ政権がその内容を暴露すると、ユダヤ人とアラブ人双方の反発を買い、とくにアラブ民族主義者の対英不信を強めることになった。

3, バルフォア宣言

1917年11月2日にイギリス外相バルフォアがパレスチナにユダヤ人の民族的郷土 national home (国とは言っていない) をつくることに同意した宣言。この宣言はロスチャイルド卿 (ユダヤ人の大資本家) 宛の書簡の形で、「パレスチナの非ユダヤ人共同体の市民的・宗教的権利が侵害されない」という条件のもとに、「パレスチナ内のユダヤ人の民族的郷土の樹立に英国政府は賛成し、この目的の達成を促進すべく最善の努力をする」と約束していた。同宣言は、イギリスがそれ以前にパレスチナを独立アラブ王国の一部とすると約束したと解されるフサイン・マクマホン書簡、およびエルサレムなどパレスチナ中部を英仏露による国際共同管理としたサイクス・ピコ秘密協定と抵触していた。バルフォア宣言はシオニストに歓迎され、第1次世界大戦後にイギリスによるパレスチナ委任統治の土台となる一方、アラブ人の対英不信と反シオニズムを強め戦前からあったユダヤ人とアラブ人のパレスチナをめぐる対立が激化した。

バルフォア宣言のスローガン

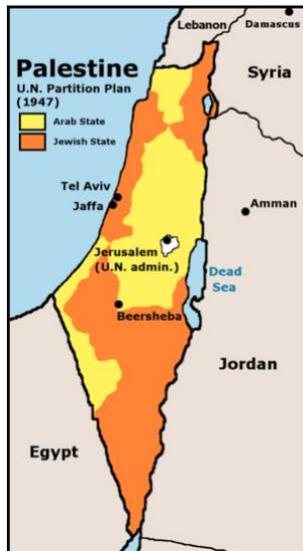
「土地なき民に ⇒ ユダヤ人に

民なき土地を」⇒ 空白の土地を (実際には多数のアラブ人たちが居住していた。)

4, 突然の攻撃、ナクバ

1948年4月9日、後にイスラエル首相となるベギンが率いるイルグンと、シャミルが率いるレヒ等のユダヤ人テロ組織によるアラブ人襲撃で、ユダヤ人テロ組織イルグンとレヒの混成軍が、エルサレム近郊のデイル・ヤシーン村でアラブ系村民の大量虐殺を行ったが、この突然の襲撃をアラブ側では「ナクバ」と呼び、その話が周辺に広まって、恐怖に駆られたパレスチナ人の大量脱出が始まった。1948年5月イギリスのパレスチナ委任統治が終了した直後に、国連決議181号 (通称パレスチナ分割決議) を根拠に、1948年5月14日にユダヤ側は**独立宣言**して、**イスラエルが誕生**した。

下図の濃いオレンジ色の部分がユダヤ国家、明るい黄色の部分がアラブ国家とされた。



5, パレスチナ分割 国連による「パレスチナ分割決議」 1947

「パレスチナ分割決議」、「パレスチナ内戦」、および「イスラエル独立宣言」

アメリカの圧力に屈したイギリスは遂に国際連合にこの問題の仲介を委ねた。ユダヤ人の人口はパレスチナ人口の3分の1に過ぎなかったが、1947年11月29日の国連総会では、パレスチナの56.5%の土地をユダヤ国家、43.5%の土地をアラブ国家とし、エルサレムを国際管理とするという国連決議181号パレスチナ分割決議が、賛成33・反対13・棄権10で可決された。この決議は、自国内の選挙において、ユダヤ人の投票獲得を目当てにしたアメリカ大統領トルーマンの強烈な圧力によって成立している。ユダヤ人を自国から追い出したいキリスト教徒が主なアメリカ、ソ連、フランス、ブラジルなどが賛成し、アラブ諸国が反対した。（イギリスはこれ以上反感を買うことを恐れて棄権）

1, 1948 - 1967 : 中東戦争 (計4回の戦争)

アラブ連盟5カ国(エジプト・トランスヨルダン・シリア・レバノン・イラク)の大部隊が独立阻止を目指してパレスチナに進攻し、第一次中東戦争(イスラエル独立戦争、パレスチナ戦争)が起こった。勝利が予想されていたアラブ側は、内部分裂によって実力を発揮できず、イスラエルは人口の1%が戦死しながらも、列強からの豊富な物資援助により勝利する。1948年の時点でパレスチナの地に住んでいた70~80万人のアラブ人などが難民となった(パレスチナ難民)。パレスチナ人を中心とするアラブ人は、この突然の事態をナクバ(アラビア語で「大破局」「大災厄」を意味する)と呼ぶ。

パレスチナ難民の発生原因については、当時は、ユダヤ人軍事組織によって追放されたというパレスチナ側の主張とパレスチナ人が自発的に立ち去ったというイスラエル側の主張があった。現在では、イスラエルの政府資料や米国の諜報資料が公開され、イスラエル側の主張が虚構であり、大多数のパレスチナ難民は、ユダヤ人軍事組織による突然の

大量虐殺であったことが証明されている。イスラエルの歴史学者のイラン・パペによれば、総計2千人~3千人が犠牲になったという。銃器による脅迫、また、ユダヤ人軍事組織による攻撃を恐れて、難民となったことは、学術的に明らかになっている。現在の学術的な争点は、パレスチナ人の追放が予め計画されたものか、それとも戦闘激化に伴った偶発的なものかという点である。

2、ガザ地区の問題

1967年の第3次中東戦争でイスラエルが占領した、ガザ、ハーン・ユニス、ラファハの3市などを含む、地中海沿岸365km²の地域。

紀元前から地中海貿易で栄えたガザ市は、635年イスラーム軍が征服。1517年からオスマン帝国が支配し、第1次大戦後に英国委任統治領パレスチナの一部となった。ガザ地区は1948-49年の第1次中東戦争でエジプトの軍政下へ、また67年の戦争でイスラエルに占領された。住民はゲリラ戦やインティファダで激しく抵抗。

・93年のオスロー合意の“原則の宣言”によるパレスチナ暫定自治政府(PA)の発足で、イスラエル人入植地などを除く地域にPAの行政権と警察権が認められた。99年末のパレスチナ人口は約110万で、大部分がスンナ派ムスリム。その約3分の2が難民。イスラエル人入植者は約8000人。地場産業が貧弱で、90年以後、出稼ぎやイスラエルへの日雇労働者の多くがイスラエル当局の“治安対策”のため締め出され、失業問題は深刻である。



赤色がパレスチナ暫定自治政府の管轄区域

3、パレスチナ暫定自治政府

パレスチナ解放機構とイスラエルによるオスロー合意により、1994年に設立された。自治政府はパレスチナの都市区域（エリア A）と辺境区域（エリア B）の両区域に対する文民統制を行う。

発足当初は PLO の主流派で、アラファート率いる対イスラエル穏健派ファタハが立法評議会選挙で圧倒的多数の議席を確保して政権を運営していたが、縁故採用や汚職が相次いだことで徐々に支持を失い、2006年に実施した2回目の総選挙では強硬派のハマースが第1党となった。

アラファートの死後大統領に就任したファタハ議長のマフムード・アッバースとハマースの内閣はたびたび対立し、2006年にガザ地区でファタハとハマースの武装組織が衝突し、ハマースはガザ地区を武力制圧した。アッバースはハニヤを首相職から解任したが、ハニヤは拒否し、ハマース率いるガザ地区とファタハ率いるヨルダン川西岸地区が分裂状態となっている。

イスラエルを含む国際社会の多くの国家は西岸地区の PA を正当政府として承認し、ガザ地区の PA はイランやシリア、スーダンといった一部の国家のみが承認している。

4、ハマース

- ・パレスチナのイスラーム復興運動。正式名称はイスラーム抵抗運動。略称のハマースは“熱情”の意。
- ・1987年のインティファダを契機に、アフマド・ヤースィーンを中心にエジプトのムスリム同胞団のパレスチナ支部として設立された。創設当初より、**同胞団が構築した社会ネットワークを基盤に社会奉仕活動と対イスラエル抵抗活動を行い**、90年代には、ヤーセル・アラファートの率いるファタハに次ぐ政治勢力に成長した。ハマースは教育、医療、福祉などの分野で一般民衆への地道な活動を続けたため、支持が拡大していった。
- ・パレスチナの全土解放を唱えるハマースは、93年のオスロー合意による和平プロセスから排除されたが、06年立法評議会選挙ではファタハを抑え第1党となった。イスマール・ハニーヤを首班とする政権が成立したが、ファタハとの対立や欧米諸国の援助停止により運営が困難となった。
- ・07年、ガザ地区においてファタハ勢力を制圧し、ハマースは同地区を単独支配下に置いた。08年末から09年初め、イスラエル軍はハマース治下のガザ地区に大規模の攻撃を行った。
- ・2000年のイスラエルのリクード党首アリエル・シャロンによる岩のドーム訪問をきっかけとして、第2次インティファダが開始されるとハマースは自爆テロやロケット砲を用いたイスラエル軍および市民ヘテロ攻撃を開始した。イスラエルは2004年3月22日に創設者のアフマド・ヤースィーンをアパッチ・ヘリによる攻撃により殺害した。翌日には最高幹部陣からアブドゥルアジーズ・アッ＝ランティーシーが後継者となることが発表されたが、同年4月17日に再びイスラエル軍ヘリの攻撃を受け暗殺された。
- ・ハマースが行ってきた草の根の民衆支援への評価、和平交渉の破たんやファタハの率いるパレスチナ自治政府への不満などから、2004年12月に行われたパレスチナ地方議会選挙において過半数の議席を獲得し、さらに2006年1月のパレスチナ評議会選挙でも定数

132 の議席中で 76 議席を獲得するなど圧勝した。同年 3 月 29 日にハマースのイスマイル・ハニーヤがパレスチナ政府首相に任命された。

・多数の西側諸国はハマースをイスラーム原理主義、戦闘的集団に指定しており、ハマースの政権参加を機にパレスチナ政府への支援を停止した。日本も支援を停止したが、世界食糧計画などを介した形で 2006 年 7 月に再開している。

6、パレスチナ問題の背後にあるもの

・シオニズムと反シオニズム

政治的目的をもつ世俗的なユダヤ民族主義で、シオニズムという呼称は、1890 年代、オーストリアの同化ユダヤ人であるナタン・ビルンバウムにより考案された。

ユダヤ人への冤罪であるドレフュス事件取材していたオーストリア人記者ヘルツルは、ユダヤ人自ら国家を建設し諸外国に承認させることを訴える。そして 1897 年バーゼルで第 1 回シオニスト会議を主宰。後にヘルツルは建国の父といわれる。1917 年にイギリス外相が「パレスチナにおけるユダヤ人居住地の建設とその支援」を約束したバルフォア宣言が出される。1947 年に国連によるパレスチナ分割決議を経て、1948 年にイスラエルが建国され、ユダヤ国家が誕生した。

・シオニズム運動の成果によって、世界中のユダヤ教徒の置かれていた抑圧的な状況からは解放され、宗教的にも精神的にも民衆の帰属先を持つことができたことは、ユダヤ人にとって、建国の形はどうであれ、何物にも代え難い大きな喜びと安心であった。ヘブライ語の復興はシオニズム運動の大きな成果の一つといえる。

・しかし、正統派ユダヤ教徒や改革派の中には政治的世俗的なシオニズムに異議を唱え、イスラエル建国とその後の政策に反対の姿勢を表明している。ユダヤ教徒も一枚岩ではない。「神はパレスチナ人を迫害するようには命じていない」例：ヤコブ・ラブキン『トラーの名において』（平凡社）

・イスラエル再建を聖書の預言の成就と受け取るキリスト教右派と、アメリカのユダヤ教徒からの支援は大きい。旧約聖書（ヘブライ語聖書）の歴史観をそのまま事実として信じる立場から、イスラエルの政策を肯定し、パレスチナ人迫害を支持する勢力がある。

・アメリカのキリスト教徒の前千年王国論に基づいて、神の敵の壊滅をユダヤ人に託し、敵が全滅したのちは、神が全ユダヤ人をキリスト教徒に改宗させるか、この世から排除し、その後メシアが再臨する、という信仰が根強い。

・一方で、イスラーム支配下やパレスチナ地域に住んできたユダヤ人は、共存体制の中で信教・移動・職業選択などの自由を得て、迫害されることなく、1400 年間、イスラーム教徒と共存してきたという事実は、今日、無視されやすい。

・西欧や東欧で迫害されてきたユダヤ人の立場が、これまでユダヤ人を迫害することのなかったパレスチナの住民を迫害する立場に転化し、パレスチナ人を「ユダヤ人化」したといえる。例：村山盛忠『パレスチナ問題とキリスト教』（ぶねうま舎）

・パレスチナ問題は新しいユダヤ人問題、もう一つのホロコーストではないか。

日本でもキリスト教会の理解の壁がある。「イエスはユダヤ人であったのか、パレスチナ人であったのか」

（図は以下のサイトから引用）http://en.wikipedia.org/wiki/Gaza_War

参考

イスラエルによる「ヘブライ語聖書（旧約聖書）」に基づく今日の「大イスラエル運動」

ユダヤ教では神が、ユダヤ人が弱小の民であったがゆえに、彼らを選んだとされ、ユダヤ教徒は「神の選民」とされたとするヘブライ語聖書の言葉に従って、戦争で勝ち取った土地だけでなく、聖書で約束された土地をユダヤ人に取り戻すという運動。ユダヤ人は、イスラエル建国後、パレスチナ各地に勝手に入植地を増やして、パレスチナ人と争いになる事例が多く、大きな問題になっている。

「約束の地」という信仰は、現在でも強く生きている。約束の地は、「エジプトの川」からユーフラテス川までの領域とされ（創世記 15:18-21、出エジプト記 23:31）、出エジプトの後、約束をされた者の子孫に与えられるとされた（申命記 1:8）。

「その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。あなたの子孫にこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテスに至るまでの、」（創世記 15:18）

最新の重要な参考文献

『ガザとは何か』岡真理著、大和書房、1400 円（+税）、2023 年

ユダヤ教の歴史について、お勧めする市川裕先生の著書。

『ユダヤ人とユダヤ教』市川裕著、岩波新書 1755、2019 年

さらに詳しい解説書は、

『ユダヤ教の歴史』（宗教の世界史 7）市川裕著、山川出版社、2009 年